様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３７４０２
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３３３０１７２

研究課題名（和文）水俣病発生確認５０年後における被害と救済策がもたらす社会的影響の総合的調査

研究課題名（英文）Comprehensive study of the social effects of damage and relief system for victims and survivors in 50 years after Minamata disease outbreak

研究代表者
丸山　定巳（MARUYAMA, Sadami）

熊本学園大学・水俣学研究センター・客員研究員

研究者番号：００００３９９６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　12,900,000円、（間接経費）　3,870,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、近年の水俣病被害者救済策や地域振興策が水俣病患者にもたらすものを50年の歴史に照して検証することであった。そこで根本的に問われることは、改めて水俣病被害とは何であるのかを解明することであった。この基礎の上に立って、今日の意義と課題を明確にして行くことである。
　そのために、過去の資料、研究成果、種々のデータを洗い直し、現地のさまざまなアクターに密着して、被害者ばかりではなく水俣病に関わるステークホルダーとともに調査を実施した。それによって、水俣病という負の経験を将来に活かすことができ、また、環境被害に関する国際フォーラムを通してその成果を国内外に発信することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to verify what the measures to the relief for Minamata disease victims and survivors and the regional development policy in the area bring to the Minamata disease patients in recent years, and to clarify the issues and challenges of/for the Minamata disease incidents in light of the 50-year history. Therefore, it has fundamental importance to clarify and renew the knowledge on what is Minamata disease damage.
For this purpose, we did studied the documents materials, the research results, the statistical data in the past. The research and survey was conducted with the stakeholders such as the victims and the various local actors involved in the Minamata disease in close contact. By this way, we were able to learn the lessons from negative experiences of Minamata disease and disseminate it to the world by the international forum on environmental pollution held in the September 2013.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：水俣学　健康被害　公害　水俣病　社会的影響評価

１．研究開始当初の背景

(1) 水俣学の提唱と発展

われわれは、故原田正純の研究に基づく水俣学の提唱により、長期継続的な学際的な研究の深化を図ってきたところであり、本研究はその到達点と成果の上に立っている。水俣病研究は量的蓄積を見れば医学研究が圧倒的に多く、その研究成果自体が制度政策の基礎におかれ、また社会的法制度的紛争の的ともなってきた。社会科学的研究で地域に内在した研究は少ない。

(2) 水俣病概念の転換の必要性

この間の研究で、水俣病が単なる有機水銀中毒症ではなく、「長期継続的な環境汚染を通じたメチル水銀中毒としての公害病」である点及び含意を明らかにしてきた。

健康被害の多様性及び病跡学的成果をふまえて行政的救済の限界と司法救済の範囲についても一定明らかにし、その上で、水俣・不知火海沿岸の地域社会構造の特質とコミュニティ研究の必要性と可能性を明らかにし、さらに水俣病事件の教訓と国際的インパクトについても問いを立てた。

(3) 社会的影響評価の方法

2009 年、水俣病被害救済とチッソの分社化を定めた特別措置法が公布され、新たな政策が実行に移された。従来の研究では、政策がもたらす意味について有効な評価をなし得ないのではないかと考えた。そこで、政策が被害者及び地域住民に対していかなる効果を持ち、影響を及ぼすのかを調査分析し将来に役立てようと考えた。水俣病研究は、これまで起きたことを後追い的に分析するか、あるいは被害者の訴えに応えることが課題とされてきた。その中で明らかにされてきた事実は多いが、本研究では、現在進行中の課題に対して、それを定量的、定性的に分析評価し、現在と将来への課題に答えようとした。

２．研究の目的

(1) 明らかにしたいこと

本研究の目的は、水俣病発生確認後半世紀以上経過した時点で、あらたに実施されている水俣病特措法にもとづく被害者救済、地域振興策とそれがもたらすものを水俣病 50 年史に照して検証し、その意義と課題を明確にして行くことである。

(2) 水俣病被害とは何であるのかを改めて解明

そこで根本的に問われることは、水俣病被害とは何であるのかを改めて解明することにあるが、そのために（ｉ）過去の資料、研究成果、種々のデータを洗い直し、（ii）現地のさまざまなアクターに密着して、被害者ばかりではなく水俣病に関わるステークホルダーとともに調査を実施し、これにより、（iii）水俣病という負の経験を将来に活かすことができるし、国内外に発信できるものと考えている。

(3) 成果の国際的な発信と検証

このようなわれわれの研究上の課題を、国際的な視点から発信するとともに検証することによって、水俣病事件史の持つ意味や現下の課題が剔抉される。つまり研究途上である成果を発信し、国際的な研究交流の中で検証することにより、さらに研究にフィードバックすることが研究の目的に内在するとともに、そのことが我々の明らかにしたいことの国際的通用性を持ちうるものと考える。

３．研究の方法

(1) 水俣学の方法

本研究においては、原田正純氏の提唱した水俣学の方法に従って、「学問領域の壁を越えた調査研究の展開」「専門研究者のみならず地域のアクターや被害当事者を巻き込んだオープンな研究体制の構築」「地の利を生かして現地に内在し現地に貢献する研究」「国際的視野に基づく研究交流と発信」を調査研究の出発点として確認した。そのうえで熊本および水俣における研究会の開催と水俣地域における臨地研究からなり、3 年間（平成 23 年度～25 年度）にわたり調査研究を実施した。

50 年にわたる水俣病被害の多様性と様々な公的施策（被害救済策・地域振興策）の社会的影響評価を現地に根ざして実施する。医学、社会・経済学、環境学、人類学のそれぞれの側面から、地元と連携し、調査を実施する。対象地域を、水俣市と対岸の御所浦島に限定し、初年度は社会的影響評価の方法や基準の策定とパイロット・スタディ、2 年目には本格的影響評価の実施、3 年目にとりまとめと補足調査および地元での結果公表と検討会を実施し、研究成果を社会に還元することとした。

(2) 研究の実施体制

本研究は、長年にわたって水俣病研究に従事し経験と蓄積を有する研究代表（丸山定巳）の総括のもと、熊本学園大学に所属する異なる学問分野の研究者を結集し、多彩な研究協力者を配置して実施された。熊本学園大

学が設置している水俣学研究センター及び水俣市内に設置されている現地研究センターを調査研究の拠点として、下記の研究班を構成し、有機的な連関を持って調査・研究の遂行に当たった。当初4つの研究班でスタートしたが、原田正純、足立明の二人の研究メンバーが他界したことにより、研究計画・目的は維持したまま、三つの研究班に再編した。

（3）研究組織の構成

① [医療と健康影響評価班]　従来、重症例ばかりが問題にされ、軽症例に関してはその病像さえ明確にされていない水俣病に関して、胎児性世代、対岸や天草など地域的な広がり、種々の医療救済施策受給者などの病像の多様性を踏まえて、患者及び住民の医学的検診を実施するとともにヒアリングをおこなうもの。この班では、水俣病の臨床医学的研究がベースになるが、それと並行して、水俣病の行政的判断基準の再検討を、水俣病の多様性と家族類似性の検証に基づいて実施する。

② [環境評価と地域構想班]　住民参加による地域づくりの検証・評価（参加行動型調査）。ここで、環境とわれわれが呼ぶのは、自然環境だけではなく、社会的な要因、人と人のつながりも含んでいる。同時に、埋め立てや工場の発展・縮小に伴う地域の土壌や水域中の残存汚染物質の分析とその影響評価を行い、水銀及び他の有害物質による汚染が土壌や底質に残っているのか、影響評価を行う。

③ [社会影響・経済分析班]　水俣病補償・救済の制度分析と地域社会への影響評価である。そのために人口移動、産業及び職業構成の変容、所得、地方財政等の基本指標の短期及び長期の変動分析といった量的評価および地域のコミュニティ変容、種々の医療や福祉サービスの提供と利用状況の変化などの社会学的な調査（定性的な評価）とを一体化して社会的影響評価を行い、そのうえで、将来の課題とその解決条件を示す。

４．研究成果

（1）この研究は、水俣学研究の経験と成果を応用して、水俣病の負の経験を明らかにし、将来に生かす教訓を国内外に発信する試みである。水俣病は発生の公式確認から 57 年を迎えているが、問題は山積している。

水俣病特措法に基づく救済策や原因企業の分社化手続きが進められ、地域振興策も打ち出されている。その結果、これまで差別・偏見のかげに隠れていた被害者が表面化し、その総数は未だ公表されないものの少なく見積もっても6万人を超えており、これまでの認定患者数や 1995 年の政治解決時の救済対象者数を加算して推計すれば 10 万人規模の被害者が存在するものと推定されることが明らかとなった。

（2）［医療と健康影響評価班］では、従来の研究サーベイを踏まえて、定期的（月に二回）に水俣学現地研究センター（水俣市）を拠点に患者の検診・ヒアリングを行った。その一部は、連携研究者である田尻雅美、井上ゆかりが公衆衛生学会にて口頭報告を行った。

ここで明らかにされたのは、水俣病の被害の地域集積性・家族集積性の持つ意味と実態であった。医療的ケアが不十分であったことは知られていたが、地域および家族に内在した調査によって、家族の関係（認定や医療給付の対象者）、被害補償制度、社会福祉的制度などによって被害認識と健康影響が大きく左右されることが明確にされた。加えて、被害者のライフヒストリーに係るナラティブも採録しており、そのことが裏付けられることが分かった（個人情報の処理に配慮して公表方法を検討中である）。

（3）［環境影響と地域構想班］は、水俣学現地研究センターを触媒とした水俣・芦北地域戦略プラットフォームをベースにした住民参加による地域づくりの検証・評価（参加行動型調査）に取り組み、定期的研究会を実施するとともに HIA(健康影響評価)に関する国内外の研究サーベイを踏まえた研究会を実施した。

また、HIA に関する国内外の研究サーベイを踏まえた研究を実施するとともに、その成果を公害発生国であるタイでシンポジウムを開き報告した。

本研究事業がスタートした 2011 年 12 月に水俣市では環境モデル都市推進委員会と専門委員による合同会議が開かれ、従来の市民参加型地域づくり手法が大きく変化し、2012 年 3 月には環境省主導で地域に関わる事業の方向性や計画が示された。これらの動き自身が、調査対象となり、現在、成果を取りまとめているところである。

いっぽう、地元 NPO の協力を得て、袋湾を中心に水俣地域の海辺の生物調査、海岸部の湧水、底質、および土壌の採取と分析を行った。生物調査では希少生物が多数見いだされるとともに底質や土壌分析では、一部高濃度の水銀が検出された。水俣病のもたらす環境影響の深刻さを示す結果であった。ただ、こ

の結果の公表は、第一に海岸部の生物が荒らされること、第二に水俣が今なお水銀汚染地域であるという事実の社会的影響の大きさを考慮して、慎重に扱うこととしている。これらのデータの持つ意味を確定して、公表するものとする。

（4）［社会影響・経済分析］班は、資料の収集ならびに被害者団体へのヒアリングを実施した。

本研究期間中、水俣病行政を巡って新たな事態が出来した。最終年度である 2013 年 4 月に認定基準を巡る水俣病行政訴訟の最高裁判決がくだされ、国が示した水俣病の認定基準（1977 年判断条件）の誤謬が指摘され、また 11 月には、水俣病認定を求める行政不服において最高裁判決の基準に従った逆転認定が行われた。それらを受けて熊本県は認定業務を停止し、環境省は新たな基準（総合的検討について）を示すとともに国の審査会を改めて設置した。このようなこと自身が水俣病事件が現在進行形の課題であることを示すものであり、この推移を受けて、［社会影響・経済分析］班では、最終的な報告書を書き直しているところである。

（5）国際フォーラムの開催と研究成果報告

2013 年 9 月、水俣学研究センターでは環境被害に関する国際フォーラムを開催し、カナダ、中国、台湾、韓国、タイの公害被害現場から研究者や住民・被害者を迎えて、研究交流を実施した。本研究プロジェクトメンバーも研究報告を行うとともに各国からの参加者とともに研究討議を行った。これらの成果は現在印刷中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 29 件）

① Tanaka,M., K. Ushijima, W. Sung, M. Kawakita, S. Tanaka, Y. Mukai, K. Tamura, S. Maruyama 、 Association between social group participation and perceived health among eldery inhabitants of a previously methylmercury-polluted area、Environ. Health Prev. Med.、査読有、2014 DOI:10.1007/s12199-014-0387-5

②Takaoka, S., T. Fujino, N. Hotta, K. Ueda, M. Hanada, M. Tajiri, Y. Inoue、 Signs and symptoms of methylmercury contamination in a First Nations community in Northwestern Ontario, Canada 、 Sci. Total Environ.、査読有、Vol.468-469、2014、950-957 http://dx.doi.org/10.1016/j.scitotenv.2013.09.015

③ 宮北　隆志、持続可能な農的暮らしと健康な地域社会の実現をめざして － 地域固有の資源を活かしたエネルギー自治、月刊社会教育、査読無、700 号、2014、28-34

④ 花田　昌宣、水俣病の教訓の内実を問う国際水銀条約と水俣病最高裁判決、社会運動、査読無、401 号、2013、22-25

⑤ 中地　重晴、水俣病などの水銀汚染にかかる歴史とあるべき今後の社会的取組み、環境技術、査読無、42 巻、2013、14-21

⑥ 中地　重晴、水銀に関する水俣条約と日本の課題、査読無、月刊保団連、査読無、1142 号、2013、44-49

⑦ 花田　昌宣、公害の原点、水俣病と福島：水俣学の視点から、震災学、査読無、２巻、2013、71-73

⑧ 牛島　佳代、成　元哲、丸山　定巳、不知火海沿岸地域住民の健康度を規定する社会的要因の探索：水俣病補償者割合という地域特性に着目して、環境社会学研究、査読有、18 巻、2012、141-154

⑨ Ushijima, K., W. Sung, S. Tanaka, K. Tamura, M. Kawakita, Y. Mukai, M. Tanaka, S. Maruyama 、 Association between early methylmercury exposure and functiona health among residents of the Shiranui sea communities in Japan、Int. J. Environ.Health Res.、査読有、22、2012、387-400 http://dx.doi.org.10.1080/09603123.2010.484860

⑩ 花田　昌宣、水俣学の現在と課題、保健師ジャーナル、査読無、68 巻、2012, 1098-1102

⑪ 花田　昌宣、井上　ゆかり、カナダ先住民の水俣病と受難の社会史(第 1～3 回)、社会運動、査読無、385 号、2012、19-24、41-45、36-40、

⑫ 花田　昌宣、水俣学の創生と原田先生の最後の仕事、環境と公害、査読無、42 巻、2012、9-13

⑬ 宮北　隆志、水俣・芦北地域戦略プラットフォームを核とした市民参画・協働の場づくりと『水俣学』、保健師ジャーナル、査読無、68 巻、2012、1004-1009

⑭ 井上　ゆかり、生活現実としての水俣病被害、保健師ジャーナル、査読無、6 巻、2012、813-822

⑮ 田尻　雅美、水俣病療養者の現在の暮らし：第 1 号患者のケースから、保健師ジャーナル、査読無、68 巻、2012、912-916

⑯ 宮北 隆志、水俣の国際化 － タイにおける近代化／工業化の進展と公害問題、月刊地理、査読無、57 巻、2012、65-72

⑰ 中地 重晴、メコンデルタ地域における参加型労働安全衛生教育の現状、海外事情

研究、査読無、39 巻、2012、107-122
⑱ 宮北　隆志、中地　重晴、花田　昌宣、丸山　定巳、藤本　延啓、田尻　雅美、井上　ゆかり、吉村　千恵、土井　利幸、マプタプット工業団地の拡張をめぐる諸問題の現状と課題、水俣学研究、査読有、3 号、2011、83-103
⑲ 原田 正純、花田 昌宣、田尻　雅美、井上　ゆかり、堀田　宣之、藤野　糺、高岡　滋、上田　啓司、カナダ・オンタリオ州先住民地区における水銀汚染 － カナダ水俣病の 35 年間、水俣学研究、査読有、3 号、2011、3-31

〔学会発表〕（計 31 件）
① 花田　昌宣、水俣病最高裁判決が拓いた水俣病事件史の新たな地平、第 9 回水俣病事件研究交流集会、2014 年 1 月 12 日、水俣市公民館
② 中地　重晴、水銀条約の内容と日本の課題、第 9 回水俣病事件研究交流集会、2014 年 1 月 12 日、水俣市公民館
③ 田尻　雅美、小児性水俣病患者の介護の実態、第 9 回水俣病事件研究交流集会、2014 年 1 月 12 日、水俣市公民館
④ 田尻　雅美、井上　ゆかり、水俣病患者の補償・救済施策の利用実態と医療／保健・介護制度の限界、第 72 回日本公衆衛生学会総会、2013 年 10 月 24 日、三重県総合文化センター
⑤ 井上　ゆかり、田尻　雅美、下地　明友、水俣病多発漁村における補償・救済制度の利用と疾病悪化に関する評価の試み、第 72 回日本公衆衛生学会総会、2013 年 10 月 24 日、三重県総合文化センター
⑥ 丸山　定巳、水俣病の教訓を活かす － 発生・拡大・補償救済をめぐって、第 2 回環境被害に関する国際フォーラム、2013 年 9 月 5-7 日、熊本学園大学
⑦ 花田　昌宣、水俣病と水俣学の試み　環境政策、被害住民の現在と水俣学の国際的展開、第 2 回環境被害に関する国際フォーラム、2013 年 9 月 5-7 日、熊本学園大学
⑧ 中地　重晴、水銀条約の課題、第 2 回環境被害に関する国際フォーラム、2013 年 9 月 9 日、水俣市もやい館
⑨ 井上　ゆかり、水俣北部のある漁村における水俣病の現状と漁業、第 2 回環境被害に関する国際フォーラム、2013 年 9 月 5-7 日、熊本学園大学
⑩ 田尻　雅美、胎児性水俣病患者の現在からみる、水俣病補償救済制度の課題、第 2 回環境被害に関する国際フォーラム、2013 年 9 月 5-7 日、熊本学園大学
⑪ 藤本　延啓、「円卓会議」のゆがみと水俣病の教訓、第 2 回環境被害に関する国際フォーラム、2013 年 9 月 5-7 日、熊本学園大学
⑫ Takashi Miyakita、Minamata and Ashikita Regional Strategic Platform Providing Opportunities for Citizens' Participation and Collaboration and "Minamata Studies"、The 2nd Annual Global and Regional Studies Symposium、2013 年 8 月 26-27 日、Chulalongkorn Univ., Thailand
⑬ 宮北　隆志、社会的困難に長年向き合う地域における『生活の質』と多様な主体による『地域運営』 － 公式確認から 57 年目を迎えた水俣病事件と水俣・芦北地域の再構築、第 54 回日本社会医学会総会、2013 年 7 月 6-7 日、首都大学東京・南大沢キャンパス
⑭ 花田　昌宣、水俣学のめざすもの：学的方法の革新、公教育計画学会、2013 年 3 学 9 日、熊本学園大学
⑮ Takashi Miyakita、The Role of the Open Research Center for Minamata Studies and Research in Map Ta Phut Area、International Conference on Risk Communication and the Possibility Towards Constructive Solutions for A Heath Future of Map Ta Phut、2013 年 3 月 1 日、チュラロンコン大学（タイ）
⑯ 中地　重晴、タイ東部臨海工業団地と住民のリスクコミュニケーションのあり方、リスクコミュニケーションとマプタプットの健康的な将来のための建設的解決に向けた可能性についての国際会議、2013 年 3 月 1 日、チュラロンコン大学（タイ）、
⑰ 宮北　隆志、社会的困難に長年向き合う地域における『生活の質』と多様な主体による『地域運営』 ～ 公式確認から 56 年目を迎えた水俣病事件と水俣・芦北地域の再構築、第 71 回日本公衆衛生学会総会フォーラム、2012 年 10 月 25 日、サンルート国際ホテル山口、山口市
⑱ 宮北　隆志、水俣・芦北地域戦略プラットフォームを核とした多面的なヘルスプロモーションの展開（第 4 報） 半世紀以上にわたり水俣病事件に向き合う地域社会の現状と課題、第 71 回日本公衆衛生学会総会、2012 年 10 月 25 日、サンルート国際ホテル山口、山口市
⑲ 井上　ゆかり、田尻　雅美、下地　明友、水俣病多発漁村における漁業と健康被害第 1 報、第 71 回日本公衆衛生学会総会、2012 年 10 月 26 日、サンルート国際ホテル山口、山口市
⑳ 田尻　雅美、井上　ゆかり、水俣病被害の地域集積性と補償・救済制度の不整合第２報、第 71 回日本公衆衛生学会総会、2012 年 10 月 26 日、サンルート国際ホテル山口、山口市
㉑ Takashi Miyakita、Experience sharing from Japan, Canada and Thailand、1st Community Health Impact Assessment (CHIA) Conference、2012 年 7 月 17 日、タイ

㉒ 藤本　延啓、ゼロ・ウェイスト円卓会議に着目して、第70回西日本社会学会大会、2012年5月19日、鹿児島大学、鹿児島市
㉓ 宮北　隆志、マプタプットの環境と健康、第1回リスクコミュニケーション円卓会議、2012年3月2日、マプチャルート寺院、マプタプット市（タイ）
㉔ 原田　正純、水俣病から現代社会を考える、第26回人権啓発全国研究集会、2012年2月2日、熊本市総合体育館ホール、熊本市
㉕ 井上　ゆかり、女島調査第１報、第7回水俣病事件研究交流集会、2012年1月8日、水俣市公民館
㉖ Takashi Miyakita、Quality of life and community governance in the region facing decade of social hardships -Fifty-five years experience of Minamata disease and revitarization of Minamata and Ashikita region、JSPS symposia 2011、2012年1月6日、マンチェスター大学、英国
㉗宮北　隆志、水俣・芦北地域戦略プラットフォームを核とした多面的なヘルスプロモーションの展開、第70回日本公衆衛生学会総会、2011年10月20日、秋田県民会館、秋田市
㉘ 中地　重晴、二次災害防止のための有害物質管理のあり方、エコケミストリー研究会効率的環境汚染測定・評価技術フォーラム、2011年9月7日、幕張メッセ国際会議場
㉙ 中地　重晴、豊島の跡地をどう活用するのか、豊島学（楽）会第5回研究発表会、2011年4月16日、香川県豊島

〔図書〕（計9件）
①中地　重晴、熊本日日新聞社、水銀ゼロをめざす世界：水銀条約と日本の課題（水俣学ブックレット⑪）、2013、78
② 花田　昌宣、井上　ゆかり、山本　尚友、熊本日日新聞社、水俣病と向き合った労働者の軌跡（水俣学ブックレット⑩）、2013、166
③ 花田　昌宣、宮北　隆志、中地　重晴、田尻　雅美、井上　ゆかり、熊本日日新聞社、水俣からのレイトレッスン（水俣学ブックレット⑨）、2013、143
④ 宮北　隆志、熊本日日新聞社、蘇陽風とくらしと健康 － わたしたちのヘルスプロモーションの実践報告、2013、132-150
⑤ 花田　昌宣、柏書房、さいれん復刻版第6回配本解説、2013、1-14
⑥ 花田　昌宣、原田　正純、日本評論社、水俣学講義第5集、2012、332
⑦ 宮北　隆志、日本評論社、水俣学講義第5集、2012、235-268
⑧ 花田　昌宣、柏書房、さいれん復刻版第5回配本解説、2012、1-20

〔その他〕
ホームページ等
http://www3.kuagaku.ac.jp/minamata/

６．研究組織
（1）研究代表者
丸山　定巳（MARUYAMA, Sadami）
熊本学園大学・水俣学研究センター・客員研究員
研究者番号：００００３９９６８

（2）研究分担者
花田　昌宣（HANADA, Masanori）
熊本学園大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：３０２７１４５６

宮北　隆志（MIYAKITA, Takashi）
熊本学園大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：５０１１２４０４

中地　重晴（NAKACHI, Shigeru）
熊本学園大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：５０５８６８４９

下地　明友（SHIMOJI, Akitomo）
熊本学園大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：９０１２８２８１

原田　正純(HARADA, Masazumi)
熊本学園大学・水俣学研究センター・客員研究員
研究者番号：００００４０５１９
（H24.6.11逝去）

足立　明（ADACHI, Aira）
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授
研究者番号：９０２１２５１３
（H24.8.26逝去）

（3）連携研究者
井上　ゆかり（INOUE, Yukari）
熊本学園大学・水俣学研究センター・研究助手
研究者番号：１０５４８５６４

田尻　雅美（TAJIRI, Masami）
熊本学園大学・水俣学研究センター・研究助手
研究者番号：７０４２１３３６

藤本　延啓（FUJIMOTO, Nobuhiro）
熊本学園大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：６０４６１６２０